

IV-279

四辺形調整覚書

八戸工業大学 正会員 岩淵清行

1. まえがき

この覚書は方向観測法^{1), 2)}で角を測定した時の四辺形厳密調整(方向補正法と言う)に関し、条件方程式をたてての³⁾古典的解法を、地理院方式⁴⁾ではなしに示したもので、コファクター^{5), 6), 7)}は使っていない。簡単の為にすべての観測精度は等しいとし、平面測量に限定し⁸⁾、推定値の誤差は述べない。また既知点の座標には誤差はないものと仮定する。

2. 四辺形調整の条件方程式による方向補正法の初等的解公式

線形化された条件方程式は行列形式で書くと次のごとし。

$$[A][\Delta H] = [F] \quad \dots\dots\dots (1)$$

[A]の要素は下のようである。記号などは図1を参照されたい。

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
$\phi 1$	-1	0	1	-1	0	1	-1	0	1	-1	0	1
$\phi 2$	0	-1	1	-1	1	0	0	1	-1	1	-1	0
$\phi 3$	1	-1	0	0	-1	1	-1	1	0	0	1	-1
$\phi 4$	-C1	+D1	-C2	-C3	+D2	-C4	-C5	+D3	-C6	-C7	+D4	-C8

ここに $Ci \equiv \cot \theta_i$ で $D1 \equiv C1+C2$, $D2 \equiv C3+C4$, $D3 \equiv C5+C6$, $D4 \equiv C7+C8$

我々の場合、直接観測値は $H_i (i=1, 2, \dots, 12)$ である。その最確値 $H_i + \Delta H_i$ を求めるのが 当面の問題である。すなわち $[\Delta H]$ は未知数行列で

$$[\Delta H]^T \equiv [\Delta H_1, \Delta H_2, \Delta H_3, \Delta H_4, \Delta H_5, \Delta H_6, \Delta H_7, \Delta H_8, \Delta H_9, \Delta H_{10}, \Delta H_{11}, \Delta H_{12}]$$

また右辺の $[F]$ の中味は $[F]^T \equiv [F_1, F_2, F_3, F_4]$ であり

$$F_1 \equiv 2\pi - \sum \theta_j, \quad F_2 \equiv \theta_6 + \theta_7 - \theta_2 - \theta_3, \quad F_3 \equiv \theta_8 + \theta_1 - \theta_4 - \theta_5,$$

$$F_4 \equiv 1/Z - 1 \quad \text{ただし } Z \equiv (\Pi \sin \theta \text{ 奇数}) / (\Pi \sin \theta \text{ 偶数})$$

であって、角の単位は数式を簡単にするためにラジアンとする。

$\theta_j (j=1, 2, \dots, 8)$ は次の如く直接観測値 H_i から、間接的に得られる測定値である。

$$\theta_1 \equiv H_2 - H_1, \quad \theta_2 \equiv H_3 - H_2, \quad \theta_3 \equiv H_5 - H_4, \quad \theta_4 \equiv H_6 - H_5,$$

$$\theta_5 \equiv H_8 - H_7, \quad \theta_6 \equiv H_9 - H_8, \quad \theta_7 \equiv H_{11} - H_{10}, \quad \theta_8 \equiv H_{12} - H_{11}, \quad \dots\dots\dots (2)$$

H_i は整理された野帳から写しとるもので普通 H_1, H_4, H_7, H_{10} の四つはすべて0度00分00秒という値をもたせる。勿論これら H_1, H_4, H_7, H_{10} は0度00分00秒とするけれども誤差をもつことはいうまでもない。かくして $\theta_j (j=1, 2, \dots, 8)$ から逆に $H_i (i=1, 2, \dots, 12)$ が一意に

でてくる事は注意しておくべきである。さて(1)式から解を一意に求めるのには 次の式

$$\Omega \equiv 1/2 \times \sum (\Delta H_i)^2 - \lambda_1 \phi_1 - \lambda_2 \phi_2 - \lambda_3 \phi_3 - \lambda_4 \phi_4 \quad \text{を最小ならしめる如くに解く。}$$

ここに $\lambda_k (k=1, 2, 3, 4)$ はラグランジュの未定係数で ϕ_k は線形化された条件方程式の左辺である。先ず始めに正規方程式 $[N][\lambda] = [F]$ から $[\lambda]$ をもとめる。ここに

$[N] \equiv [A][A]^T$ である。 $[\lambda]$ は $[N]^{-1}[F]$ で計算される。そして、 $[\Delta H]$ は $[A]^T[\lambda]$ からもとめられる。パソコンなどがない人のために (すなわち、手計算の

ために) 正規方程式を具体的に書きあらわしてみると

$$\begin{cases} 8\lambda_1 & & & + V_1\lambda_4 = F_1 \\ & 8\lambda_2 & & + V_2\lambda_4 = F_2 \\ & & 8\lambda_3 & + V_3\lambda_4 = F_3 \\ V_1\lambda_1 + V_2\lambda_2 + V_3\lambda_3 & + & V_4\lambda_4 = F_4 \end{cases} \quad \dots\dots\dots (3)$$

ここに $V1 \equiv C1 - C2 + C3 - C4 + C5 - C6 + C7 - C8$, $V2 \equiv -D1 - C2 + C3 + D2 + D3 + C6 - C7 - D4$

$V3 \equiv -C1 - D1 - D2 - C4 + C5 + D3 + D4 + C8$, $V4 \equiv \sum Cj^2 + \sum Dk^2$ ($j \equiv 1, 2, \dots, 8$; $k \equiv 1, 2, 3, 4$)

従って $\lambda 4 = (8F4 - V1F1 - V2F2 - V3F3) / (8V4 - V1V1 - V2V2 - V3V3)$, $\lambda 1 = (F1 - V1 \lambda 4) / 8$,

$\lambda 2 = (F2 - V2 \lambda 4) / 8$, $\lambda 3 = (F3 - V3 \lambda 4) / 8$

故に

$\Delta H1 = -\lambda 1$	$+\lambda 3 - C1 \lambda 4$,	$\Delta H2 =$	$-\lambda 2 - \lambda 3 + D1 \lambda 4$
$\Delta H3 = +\lambda 1 + \lambda 2$	$- C2 \lambda 4$,	$\Delta H4 = -\lambda 1 - \lambda 2$	$- C3 \lambda 4$
$\Delta H5 =$	$+\lambda 2 - \lambda 3 + D2 \lambda 4$,	$\Delta H6 = +\lambda 1$	$+\lambda 3 - C4 \lambda 4$
$\Delta H7 = -\lambda 1$	$- \lambda 3 - C5 \lambda 4$,	$\Delta H8 =$	$+\lambda 2 + \lambda 3 + D3 \lambda 4$
$\Delta H9 = +\lambda 1 - \lambda 2$	$- C6 \lambda 4$,	$\Delta H10 = -\lambda 1 + \lambda 2$	$- C7 \lambda 4$
$\Delta H11 =$	$-\lambda 2 + \lambda 3 + D4 \lambda 4$,	$\Delta H12 = +\lambda 1$	$- \lambda 3 - C8 \lambda 4$

かくして最確値 $H_i + \Delta H_i$ がもとめられる。また(2)の関係から θ_j の最確値が得られる。手計算の時は(3)式の右辺すべてに $(3600 \times 180 / \pi)$ をかけて秒単位で計算したほうがよい。

3. 数値計算例

H_i が度分秒で次の如く(秒の下一位まで)あたえられてるとせよ。図1参照。

$H1 = 0$, $H2 = 28.15145$, $H3 = 57.34264$, $H4 = 0$, $H5 = 50.18262$, $H6 = 117.57061$

$H7 = 0$, $H8 = 32.43410$, $H9 = 55.16539$, $H10 = 0$, $H11 = 57.04254$, $H12 = 129.11361$

10桁電卓による手計算の答(秒) 表示は小数点下3位未満切り捨てしている。

$\Delta H1 = +0.423$, $\Delta H2 = +0.322$, $\Delta H3 = -0.745$, $\Delta H4 = +0.133$, $\Delta H5 = -0.272$, $\Delta H6 = +0.139$,
 $\Delta H7 = -0.600$, $\Delta H8 = +1.460$, $\Delta H9 = -0.859$, $\Delta H10 = +0.143$, $\Delta H11 = +0.791$, $\Delta H12 = -0.934$

10桁計算の結果は(1)式を満足している。

4. 参考文献(方向補正法に関するもののみ)

- 1) 坪川, 大森: 測地学序説P.277, 山海堂, 昭和44年(この本によると方向の概念は1821年 Gauss にはじまる。)
- 2) 日本測量協会: 測地測量1 現代測量学第4巻 P.123, 日本測量協会, 昭和63年(この本によると方向観測法は1820-1830年 F.W.Bessel と W.Struve により確立された。角観測法は1870年シュライバーまでは無かった。)
- 3) 森: 測量学2応用編P.33, 丸善, 昭和56年(条件方程式が示されている。答なし)
- 4) 千葉: 最小二乗法p.132問題6.9, 山海堂, 昭和52年(覚書の数値例はこの問題と同値)
- 5) 岩淵: 東北支部発表会講演概要平成2年3月PP.344-345(コファクター使用条件方程式法)
- 6) 岩淵: 第45回年講第4部平成2年9月PP.288-289(コファクター使用観測方程式法誤記あり)
- 7) 岩淵: 東北支部発表会講演概要平成3年3月PP.388-389(コファクタ無し観測方程式法)
- 8) Rainsford, H.F. (1979), Survey adjustments and Least Squares, PP.131-162(この本では球過量ある時の四辺形調整をしめしている。)

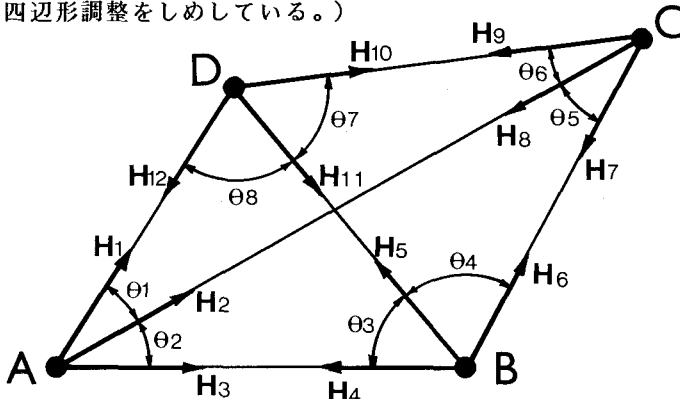


図1. A点とB点は既知点。 H_i ($i=1, 2, \dots, 12$)は観測方向